

善きものに蝸牛の歩み悲観せず

(平塚市) 宇賀田洋巳

冷酒^{ひやしゅ}までも独りを慎まず

(和歌山県由良町) 藤田 昌幸

水中花身を震はせて咲きにけり

(野田市) 塩野谷慎吾

三百万死者がつくりし第九条

(鎌倉市) 佐々木 眞

青空にまふたはあらず夏燕

(稲城市) 日原 正彦

あめんぼに水面は固し跳べるほど

(大垣市) 大井 公夫

溝浚^{さう}へもんどり打つて水流る

(明石市) 榎野 実

明易のせるにしてゐる大あくび

(高松市) 葛原 由起

半日を長刀鉾^{ながはなほ}につきゆけり

(尾張旭市) 古賀勇理央

なにげなく揺らす団扇^{うちあし}の暑さかな

(甲府市) 藤巻 嘉秀

【評】一席。スポーツも交通も速さを競う現代。ゆったりこそが美德。二席。独り酌む冷酒のよろしさよ。わいわい飲むだけが酒にあらず。三席。少しずつ開く水中花。その静けさに激情をみている。十句目。蒸し暑い日本の夏の空気を詠んだ。

父の日や戦語らぬ儘^{まま}逝けり

(筑紫野市) 二宮 正博

朝ぼらけ白寿の嫗^{おばあ}草むしる

(横浜市) 河野喜多子

疎遠なる生家の庭の柿の花

(栃木県壬生町) 小谷野代志子

青大将素直に生きて愛されず

(小山市) 倉井 敦子

肩書も過去も脱ぎ捨て更衣^{しんぎをかえ}

(石川県能登町) 瀧上 裕幸

戦死せし叔父の葉書^{はがき}を虫干しす

(前橋市) 荻原 葉月

遠目には花咲くやうな袋掛^{ふくろかけ}

(長崎市) 徳永 桂子

田植機^{たうえ}に田植機道を譲りけり

(今治市) 横田青天子

過疎の地に高速道や青田風

(戸田市) 蜂巢 厚子

父の日や父となりたる息子たち

(流山市) 成田美津子

【評】第1句。父は太平洋戦争の事を語らず亡くなった。苦い思い出なのだ。第2句。朝早くから99歳の嫗が庭の草取りをしている。健やかな暮らし振り。第3句。久しぶりに訪れた生家の庭の柿の花、実を摘いで食べた子供の頃を思い出す。